2

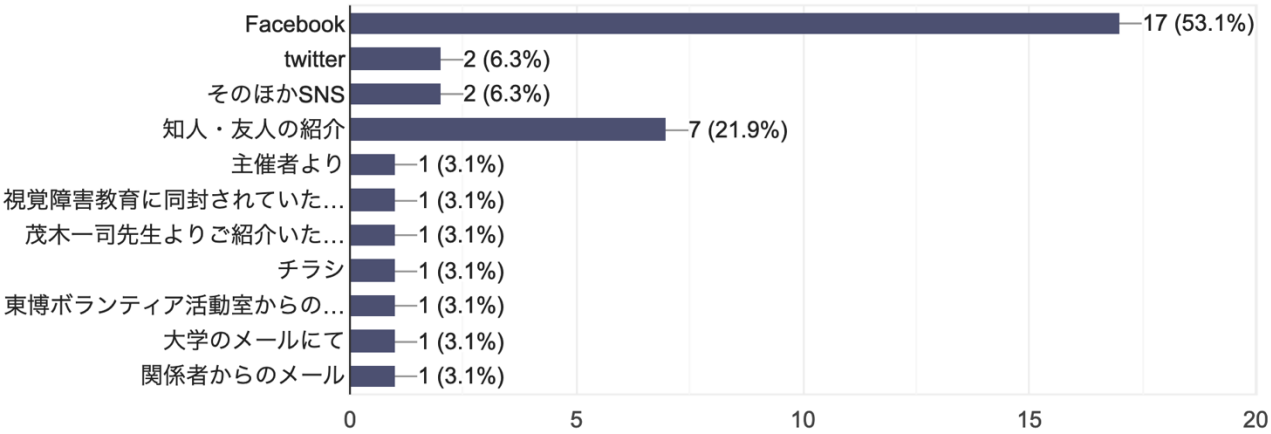
◎第２回　 2022 年 2 月 22 日(火) 19:00～20:30
「子どもが主体的に学ぶ視覚障害支援美術教育の実践とはどういうものか？―インクルーシブ教育時代の視覚障害美術教育の現状とこれから」

登壇者：多胡宏(元群馬県立盲学校長)×栗田晃宜(元香川県立盲学校)×山中由美子(東京都立八王子盲学校)×茂木一司(司会)

【アンケート2】『視覚障害のためのインクルーシブアート学習：基礎理論と教材開発』出版記念オンラインイベント
結果まとめ

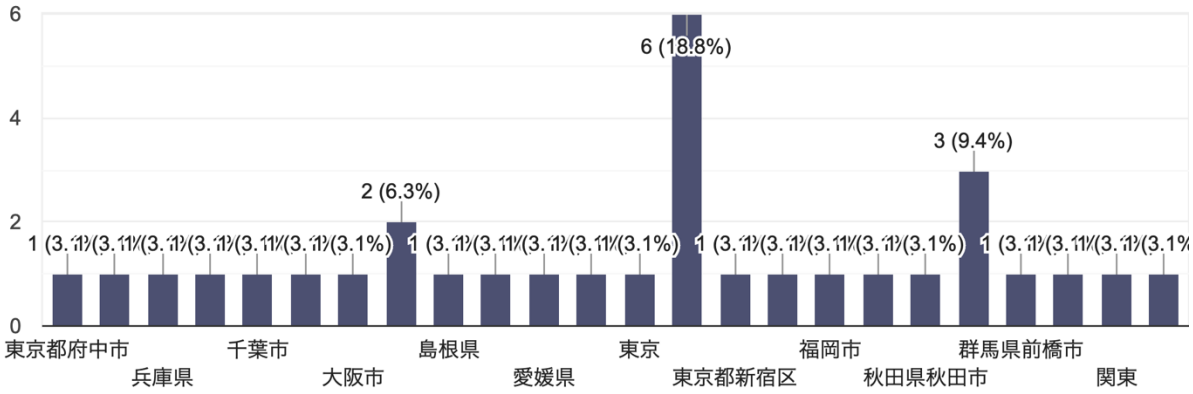
出版記念オンラインイベント(回答)

1.このイベントのことを、どのようにしてお知りになりましたか。
32 件の回答



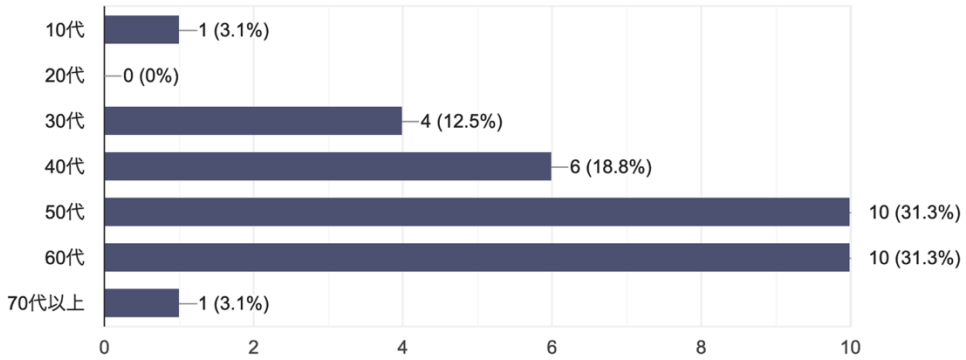
2.どちらにお住まいですか？

32 件の回答



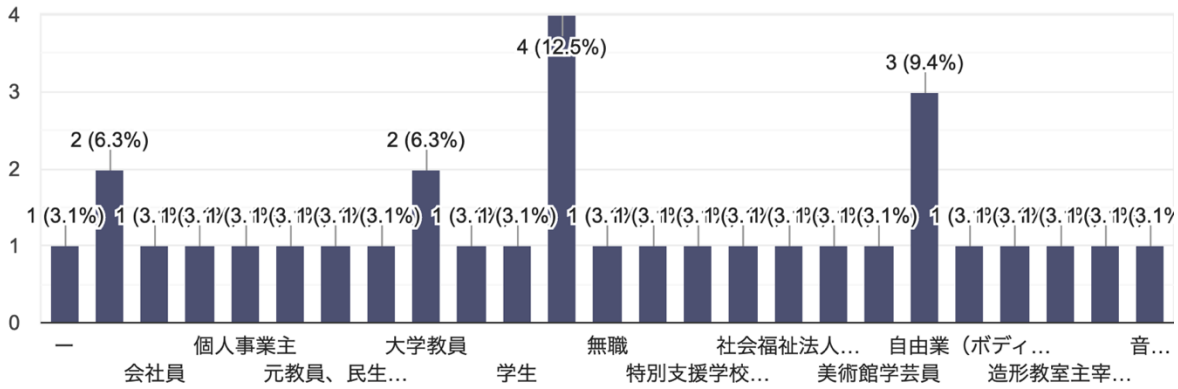
3.ご年齢を教えてください。

32 件の回答



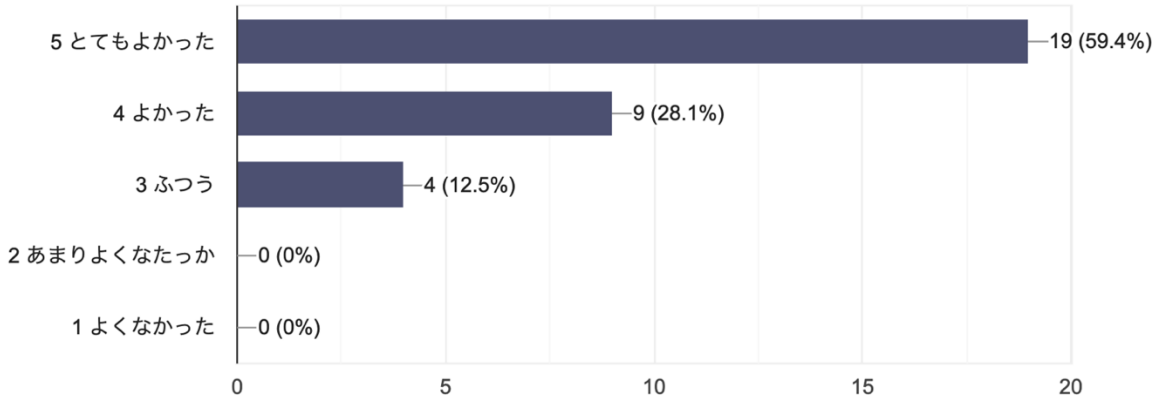
4.ご職業を教えてください。

32 件の回答



5.本日のイベントはいかがでしたか？

32 件の回答



6.ご意見・ご感想・ご質問など

特別支援学校の教育方針を知れて良かったです。

栗田先生のお話を聞くことができてよかったです。
文京盲学校の山本先生が参加されていたようだったので、音と美術のお話は聞いてみたかったです。ベテランの先生方の貴重なお話がたくさん聞けました。若い先生方は、どういう取り組みや考え、現在どんなことをされているのか、難しく思っているのかなども気になりました。
本日も、素敵なトークイベントありがとうございました。
盲学校美術の教育現場でどのようなことを先生方がなされていらっしゃるのか、どういうことを大切にしながら児童生徒と接しているのか、よくわかりました。
特に、栗田先生の遠近法を学ぶための、輪っかと棒で自作された教材、ロープと枠で自作された教材は素晴らしい！と思い、感動しました。私も、盲の方に遠近法の作品を触図にし、対話による鑑賞をおこなった際、どうやっても言葉では遠いものが小さくなる遠近法を伝えることができず、「こうやったらよかったのか！」と学ばせていただきました。ぜひ真似させていただきます。
また、山中先生のゲルニカの実践も、素晴らしいです。この切り抜きを自作されたご苦労以上に、青眼者がゲルニカやモナリザのように、「美術に関心がない人でも知っている」を、みえない子供たちにも作りたいという思い、また、最初の母子の切り抜きだけかと思ったら、ほぼ全体の人物や動物を切り抜き、さらには、触図を自作したことで先生方にも気づきがあった（馬に槍が刺さっていた）とは、アートの学びが大いに響いていると思いました。
今回も大変勉強になりました。
次回も楽しみにしております！
具体的な実践のヒントをたくさんいただけました。お話をきいて、自分の授業でやりたい事がたくさんできて、来年の授業が楽しみになりました。
ありがとうございました。
長年にわたり実際に生徒さんと接しておられる／おられた先生方の生の声は大変説得力があり、生徒さんとの密な関わりが目に浮かぶような思いで拝聴させていただきました。今回のテーマは「主体的に学ぶ」ということでしたが、逆に、主体的ではない実践はどういうものなのか、どういうところに気をつけないと受動的になってしまう恐れがあるのか…という、失敗談といいますか反面教師的なお話をしていただけると、わたしのようなまだまだ経験値の浅い実践者が気をつけておくべきことが分かって更に学びの多い機会になったかなと思いました。（質問を投げかけさせて頂けばよかったですね、申し訳ございません！）次回も楽しみにしています。

たくさんの実践が見られてとても良かったです。ありがとうございました!
それぞれの先生方の具体的な実践例のお話により、現状と今後の課題についてわかりやすく理解できました。ありがとうございました。

良かったです。1 回目の時知らなかったので、アーカイブが公開されたら嬉しいです。
具体例が魅力的でした。蜜ろうペンについて、もっと知りたいです。事例はカラー刷りになりませんか？色と形の美術なのに惜しいです。

盲学校での様々な具体的な取り組みのお話で、興味深く聞くことができました。ありがとうございました。聞きやすい時間帯でありがたかったです。
1回目の配信を聞き逃してしまいました。短期間でも、アーカイブ配信があればうれしいです。
「視る」とはどういう営為なのかということを、「みえない・みえにくい」かたの立場から逆照射しておしえていただいた、スリリングで実りある時間だった。先生方は目の前にいる子どもたちの姿からヒントをもらって教材をつくり、それを使って次は子どもたちが学ぶ。教えること・学ぶことが一方通行でなく、また相互に信頼を高め合う関係になっているところに感動した。
それぞれの方の指導内容、方法の多様さを知れてよかったです。児童生徒の発達段階等によっても異なるかと思いますが、子どもたちにとっては、どの指導方法が良いのかなど、色々考えることがあったので、もっとお話を聞いてみたかったです。
美術には色とかたちだけでなく、感じることと考えることも重要。その拡張性を持った教育が大切。
音と何か・・そこでできることを考えてみたい。ボディワークの指導の中で実践してみている。
先生方がご苦労なさってオリジナルの指導用具や教材を作られているお話など、たいへん興味深く伺いました。少子化や自由化などにより特殊教育の場の存続の危機も気になります。近年鑑賞教育の場での視覚障碍者との関わりが注目されていますが、美術館などでも積極的に取り組んでもらいたい課題だと思います。

実践の話しが聞けて良かった。
様々な感覚を駆使して作品を作る楽しみ、出来上がったものを触って得られる充実感、自分の作ったものを触ってもらったり友達が作ったのものを触ったりして交流する楽しみ、年月を経て自分の作った作品を触って感じる懐かしさ・・・などなど、美術教育を通して多くのことが得られると思います。
昨今の盲学校の少人数化・重複化は著しく、一人きりで美術の授業をしなければならない生徒も生じます。教員の視覚障害教育の専門性低下とともに、生徒にとって美術の楽しみが減っていくこと、感受性を養う機会が失われていくことを憂えています。
講師の先生方、貴重なお話ありがとうございました。これまでの教育実践とこれからの美術教育について事例を交えたお話に、これまでの自分の実践を振り返ったり、今後の指導に生かせるアイディアをたくさんいただいたり、有意義な時間を過ごす事が出来ました。
各県 1 校の視覚支援学校で、児童生徒数が減少している現状で、美術の教員のネットワークはかなり重要となると思われます。全国盲学校図工・美術研究会の取り組みや教育実践など、web 上で見られると今後につながると思います。（全日盲の発表も常に図工・美術があるわけではないので） 先生方アイディアを出し合いましょう。
昨日もよいセッションをありがとうございました。森美術館の白濱恵里子です。
数年以上もご無沙汰しておりましたが、八王子盲学校の山中由美子先生には以前お目にかかり触察教材を拝見致しました。当時も多くの美術館は、盲学校の生徒さんが安心して参加できる授業、作品に触れ合って頂ける企画は模索している状態でした（東博や西洋美術館等ではコレクションを活用した企画が既におありだったように思います。また、名古屋市美術館では、機材を用いた触察絵画の制作にチャレンジしておられました）。
「学校で学ばなければ生涯、美術館に近づくことはないかもしれない」という想いで、ご苦労を惜しまず教材づくりと実践に取り組まれている先生のお仕事に、大変感激しておりました。
その際に感じたことは、美術館と盲学校（学校）の現場は常に多忙で、互いを知るための情報共有の時間・機会が持てない事のもどかしさです。私自身も研究会などで幸い得ることができた情報は点となって残っていますが、線として繋がっていないのが現状です。

盲学校の学びにおいて、美術館はどのようなかたちでお役に立てるでしょうか。
茂木先生も仰っておられましたように、現代ではアートは多様になり、映像や音楽、光、デジタル表現も多いです。ですが、私たちの身近な暮らしや社会問題と直結したテーマを含むものも多く、図工・美術に限定されない、社会や歴史、国語や哲学（自分なりに思考し発言する経験）などを体験的に学ぶ契機にもなりうるのではないかという思いを抱いております。
当館の視覚障がい者の方とのツアーでも、現代アートから学ぶ要素はほぼ同じです。大人もこどもも、「初めてみる」ものと驚きをもって向き合い、それぞれの心と知識を動員させて作品やテーマに出合っていただくのです。視野を少し広げたり、常識や従来の自分の考えを反転させたりする経験… アートは気づきや新しい発想に溢れている、そういう性質もあるのだと、存在を子どもたちに知って頂くだけでも嬉しいことです。

美術館と盲学校のよい連携を探っていくことは、直近の課題であるとも感じました。
そしてこれは 90 年代、学習指導要領に「地域の美術館・博物館の利用」「鑑賞の充実」が盛り込まれたことが後押しとなり、各美術館が教育活動に着手し始めた頃の状況を思い出させます。多くの地域で「美術館と学校の連携」をテーマに研究会や実践・検証が行われ、時間を経て現在の基礎が出来上がってきたと言えます。（この機運の中で、盲学校との連携が十分でなかったことは悔やまれます）
上記の経験からも、担当者は最初は常に手探りですが、互いの現状を知ることからがスタートになります。この度、点が線となりうる素晴らしい本を制作して頂けましたこと、またオンラインセッションを実施して頂けましたこと、茂木先生に大変感謝いたします。

＊第 1 回のアンケートにて茂木先生のお名前を打ち間違ってしまいました。お詫び申し上げます。大変失礼致しました。

インクルーシブルアート教育に興味を持ち、全く知らないので、現状などを知りたい、学びたいと思い、また通常学級でできることはないかと思い参加しました。

今回は現場の先生方のお話で、課題設定の工夫など興味深く伺いましたが、盲学校の体制など（障害がどの程度の子が対象なのか、なぜ減ってきているのか、クラス編成など）を知らないものにとって、勝手に想像するしかないところもあり、小さな壁を感じました。

昨日の作品例の中には授業などでやってみたい課題もありましたので、障害のあるなし関係なくできることもありそうだと感じています。
工夫された、実践的な内容がとても参考になりました。ゲルニカがとても面白かったです。見える、見えにくいに関係なく、学習する価値のある内容だと思います。見るということがどういうことなのか、もっと知りたいと思いました。また、前日の広瀬先生のお話とも通じるところがあると思いますが、触るということは見えにくい人たちが学習のなかで体得してきているもので、一朝一夕に身につく者ではなく、見える者は「触る」ということを体験していく、その先に、新しいことがあるのでははいか、と考えます。

本の中の図版など、ビジュアル的に示していただきたかった
どのお話も、とても興味深いものでした。今年度から盲学校の美術の教諭をすることになり、模索しながら視覚障害のアートに取り組んでいます。20 代の時は、美大を卒業し銅版画家として活動していました。今、こうして盲学校の美術に関わることができ、教育としてのアートと芸術としてのアートとうまく融合できないかとも思っています。今学期は、木版画やスチレン版画をおこなっています。木版画は彫ったところが凹むので、全盲の子も分かるようで一人で彫っていました。彫りたくない場所はマスキングテープや養生テープを貼り、彫らないようにしました。摺るときは、バレンも使いますが、途中から手でこすりました。版画は摺った紙の方が作品として扱われますが、見えにくい子や全盲の子には、版の方も立派な作品になると思いました。

今回のイベントの中で、触図ペンが出てきました。春頃に触図ペンのことを知り、値段やどこで購入できるのかを調べたのですが、見つけることができませんでした。制作された町工場のことや書籍は見つけることができたのですが、値段や販売ルートははっきり分かりませんでした。（今は違うのかもしれませんが）ただ、値段が高いらしいことは分かりました。美術科の予算があまりない、他にも購入しなくてはいけない道具があるなど、触図ペン購入にはハードルの高さを感じました。イベントの中でもう少し安く触図ペンに近いものを研究中であるという話がでたと思いますが、大変期待しております。グルーガンでもできないか…とも思いましたが、線を描くことはできません。同時に、触図ペンがあれば平面制作ができるのかというと、それはまた別の課題であるとも思ったので、まだまだ先にやるべきこと、考えるべきことを先にやりたいと思います。県内に盲学校は 1 校ということで、寂しさも感じますが、同時にやりがいも感じます。私に関わった子供たちの生活がより豊かになるよう頑張りたいと思います。

盲学校で長年にわたり教育に携わってきた方達がどのような取組みをしてきたのか、本人から伺うことができてよかった。映画・テレビ・舞台などの視覚情報を視覚障がい者に伝えることをしています。当事者メンバーと共に制作を行うことが多いのですが、先天盲のかたが盲学校でどのような教育を受けているのかは中途失明のメンバーにもわからず、今回はとても参考になりました。
多胡先生の「自立活動を美術に応用する」「粘土も描画と同じように発達する」というお言葉，栗田先生のからだを使った遠近法のとらえ方，山中先生のゲルニカに示された一つひとつの場面に注目した模型，すばらしかったです。

美術の先生は実際の子どもたちにどうやって教えるかが分かって興味深かったです。

次回も期待しています。
私は美術館で障害のある方と作品を鑑賞するプログラムでファシリをしています。様々な障害の方が参加されます。視覚障害の方の参加者から「触って見たい」ご要望が多々あり、触知図を作る方法をいろいろ考えていました。今日のレクチャーで登壇者の皆さまのこれまでの工夫を知ることができ、今後の方向が少し見えてきました。本日、本を買いましたので、しっかり勉強させていただき、今後の鑑賞会に活かしていこうと思いました。ありがとうございました。
現場での創意工夫や問題点など、外部の人間には通常知ることが出来ない内容が様々伺えて、勉強になりました。ありがとうございました。
最後に行われるトークでは、やりとりの中から皆さんの考えをお聞きすることができ、また本を見返そうという気持ちになります。
あと 2 回のトークも楽しみです。

いろんな取り組みのお話を伺えてよかったです